

# 中国書画の本質とは何か

松村茂樹著  
書と画を論じる



四六判 216頁  
研文出版  
[本体 2,000円 + 税]

木村 淳

本書の著者、松村茂樹氏（大妻女子大学教授）は中国文化論、アジア太平洋国際交流論を専攻とし、『呉昌碩研究』（研文出版、二〇〇九年）、『書』を考える——書の本質とは』（二玄社、二〇一〇年）など多数の著作がある。新刊となる本書のテーマは「書と画」である。

著者は「はじめに」において執筆の目的を次のように述べている。中国では書や画の技術に優れる工人（工匠）よりも、自らの胸臆を詩書画で表現することができる文人が尊敬された。そのため、「書と画を論じる」とは、技術ではなく文人を論じることになる。実は、中国の書と画の本質は、これによってはじめてわかるのではないか。本書は、このような観点から、中国の書と画の本質を明らかにするべく刊行された」（四頁）。

また、世界で影響力を高めている中国を理解することが必要になっている現在、「中国を動かす文人が作ってきた書と画を論じることで本質的理解がなされ、さらに日本における受容を見ておくことで良好な国際関係が図れると、著者は信じている」（四頁）とも述べられている。つまり評者のような書画に詳しくない読者にも、本書の内容は中国の文化を考える上で参考になりうることを示されている。

本書は著者がこれまでに発表してきた論考を四つのテーマにまとめたもので、構成は次の通り。

はじめに

I 王羲之書法とは何か？

漢字のはじまりと正鋒／太宗と王羲之書法／書論に見る

## 「十七帖」／帖学派の書法

### II 文人の思い入れ

清代条幅の款書を読む／何紹基の隸書——その飄逸さの

本質／今井凌霄先生蔵 吳昌碩「臨石鼓文・水墨花卉

六曲一双屏風」

### III 中国文人画を読む

吳昌碩「大寿桃図」／溥儒「人馬図」／王一亭「自画像」

／趙之謙「鍾馗像」／黃賓虹「雪壑奔泉図」／任伯年「隔

簾仕女図」

### IV 日本における受容

中林梧竹の臨書論／吳昌碩が日本にもたらしたもの——

河井荃廬・長尾雨山を介しての伝播／書画文墨趣味の

ネットワーク

### あとがき／初出一覧

これらの問題が豊富な図版とともに論じられている。ここから評者が印象に残った箇所を取り上げて本書の本質を探究する方法を紹介したい。I章「王羲之書法とは何か？」では、まず文字の本来の性質から説き起こされる。最古の漢字である甲骨文は古いに用いた亀甲・獣骨に、その記録として書かれたものである。天との交信の記録である文字は尊厳性・神

秘性を持つことになった。朱筆で下書きをした際に筆が骨に直角にあたることになり、鋒先は筆画の中心を通る。これがその書の正統的筆法である正鋒の原点となった。下書きされた後に断面がV字になるように刻されるが、これは正鋒を用いた場合に鋒先が筆画の中心を通ることの反映である。後の石碑はこれを受け継ぎ、銘文は正鋒で書かれ、V字に刻されたものが多い。不朽の盛事を後世に伝える石碑は正鋒で書かれなければならないというのが漢民族の意識であり、これを正統尊重主義と著者は呼んでいる。

四世紀に現れた王羲之は筆を斜めにする偏鋒、スナップを利かせた驚頭法などによって筆画に変化をつけ、書を芸術に高めた。北朝出身の唐の太宗は南朝との文化融合をはかるために、南朝文化の最たるものである王羲之を重視した。しかし初唐の三大家（虞世南・歐陽詢・褚遂良）は正統を尊び、王羲之の字形を正鋒で書いたため、純粹な書法は伝わらなくなってしまった。著者は真跡が伝わらず神秘のベールに包まれたことが「王羲之神格化のゆえんなのであろう」（三二頁）と指摘する。文字の形からではなく、書の原因や書法の正統を探ることで、王羲之書法が神格化された理由の解明を試みていくのである。書画は造形の美しさによって人を魅了するものではあるが、それを生み出した文人達の意識をも探ることに

よって、その本質を探ろうとする本書の手法が表れている。

作品の様式のみを見ても、十分な学書や鑑賞ができないことは本書で繰り返し述べられる。書画を深く理解するための鑑賞方法が示されるⅡ章とⅢ章を見てみよう。まずⅡ章の「何紹基の隸書——その飄逸さの本質」を例とする。何紹基は本来謹厳である隸書を飄逸に書いたことに魅力がある。しかし何紹基は学者として隸書を書くことを基礎とし、書家としてのこだわりを加えた結果、飄逸さが生み出された。つまり学問を積まない限り形を真似ても軽薄になるだけであり、鑑賞においてもその本質を考察する必要があると著者は主張する。

同じく画も様式のみをとらえてはならない。文人画は画だけを見ても深い理解は得られないため、「文人画に詩文が題

されていたなら、まずはこれを読み、その上で画を鑑賞して、作者の胸中の意を探るように努めれば、深い理解に到達し易くなるのである」(一一五頁)と「画を読む」鑑賞法が提起される。その方法をⅢ章の「溥儒「人馬図」」を例に見てみたい。

溥儒は清朝の皇族で、宣統帝溥儀の従兄弟にあたり、共産党政権成立後は台湾に移り、書画家、大学教授として活躍した。「人馬図」は下半分にまだら馬に乗った人物が描かれ、上半分には題画詩一首と款識かんしからなる題款が記されている。その内容は三〇歳を迎えた長子の毓壘いくりゆうに与えた訓戒となっている。馬を皇族のメタファーとし、滅びた王朝の皇族としての誇りを保ちながら、それゆえに陥るであろう多くの困難に対処せよと戒めたのである。しかしここに描かれた人物は息子を写生したのではなく、古画をもとに描かれた人物であ

乾 源俊著

△最新刊▽

## 生成する李白像

李白の詩人像がどのように形成されたかを、文集序と、詩作品とくに歌辞文学「歌行」を主な材料として考察。李白科挙不応の定説に対し、制科「高道」挙に応じたことを初めて指摘するなど著者独自の観点から、広く唐玄宗朝の宗教・社会思想上の問題についても言及。

8500円

石 碩著

謝朓詩の研究

その受容と展開

5500円

松村茂樹著

書と画を論じる

研文選書 2000円

土屋英明著

中国艶書大全

正・続

各2400円

近代日本漢籍影印叢書②

川田剛『甕江文稿』

12000円

研文出版 〈税別〉

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337  
<http://www.kenbunshuppan.com/>

る。なぜなら、文人である溥儒は写生ではなく「写意」により、胸中の意を述べているので、本人に似ているかどうかは問題にならないからである。さらに溥儒はこの「人馬図」とほぼ同じ画を描いている。こちらは題款を読むと対象は溥儒自身で、自らの人生の暗転が暗示されている。題款も読むことで「同じような画が、作者の胸中の差異により、全く別のものになる」(二三頁)という、文人画のおもしろさに気づかされるのである。

IV章は中国書画の日本における受容が論じられる。まず、「呉昌碩が日本にもたらしたもの——河井荃廬・長尾雨山を介しての伝播」に注目したい。詩書画印四絶によって「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩については、II章で「文人書画家としての呉昌碩の全てを凝縮して鑑賞することのできる、極めて貴重な一作」(一二頁)である「臨石鼓文・水墨花卉 六曲一双屏風」をもとに詳しく論じられている。ここでは呉昌碩によって日本にもたらされたものを見ていく。

河井荃廬は篆刻家で、一九〇〇年呉昌碩を上海に訪ねて直接師事し、呉昌碩が社長を務めた西泠印社(せいれい)の名誉社員となった。帰国後は日本では学べなかった中国の伝統を伝えた。当時の日本書壇では宋元以降の書は学ぶ必要がないとされ、清朝のものなど論外であると見なされていた。そうした中で荃

廬は清の呉讓之、趙之謙、呉昌碩を書画篆刻すべて一級であるとし、「書画篆刻三絶」という文人氣質の重要性を訴えたのである(二七〇頁)。呉昌碩に学んだ荃廬は文人として行う篆刻に目覚め、文人趣味の重要性を提唱した。これは中国の伝統に基づいていたために傾倒する人物を輩出し、「荃廬の弟子の西川寧、その弟子の青山杉雨」という影響力の極めて大きな指導者がこれを受け継ぎ、喧伝したことにより、日本の文墨界に定着したのではあるまいか(二七二頁)と指摘している。

長尾雨山は東京高等師範学校教授時代、教科書検定も兼務していたために教科書疑獄事件に巻き込まれ、一九〇三年より上海の商務印書館に勤務した。呉昌碩が近くに転居してきたことにより、両者の交流が始まった。呉昌碩は雨山の学問と人物を評価し、自らが関わる詩会に招いた。雨山は詩会を通じて詩の技術を高め、特に学問が必須である中国の文人たちの思考や行動を学んだ。帰国後は京都に住み、呉昌碩も好んだ蘇東坡をしのぶ詩会を開催したことがきっかけで、関西文墨界の指導者の存在となった。また、雨山は高島屋美術部による図録の発行や展覧会の開催を通じて日本における呉昌碩の声名を一気に高めた。紹介した目的は、書・画・詩・学問が一体化している中国の文人の姿勢を日本人に伝えようと

したことにあった。

このように荃廬は呉昌碩の「正統的文人書画家刻家の側面」を、雨山は「中国の伝統的学者・詩人の側面」を伝えた。それによって「日本には、中国の正統と伝統が具わるようになった」と結論づけている（一八九頁）。

次に「書画文墨趣味のネットワーク」では、初めに「羅振玉帰国送別会記念写真」が掲げられる。この写真は羅振玉が八年にわたる京都での寓居生活を終えて一九一九年に中国に帰国するにあたり、京都の日本料亭左阿弥さあみで開かれた送別会に参加した計三八名を撮影したものである。このような書画を通じた各界のつながりは「もとより政治的意図はないが、当時のいわゆる極端な欧化主義へのアンチテーゼとして、一定の理性的役割を果たしたのではないか」（二〇二頁）とする。こうした人的交流の丹念な発掘、整理も著者の得意とする研究手法である。

なお、著者は本書に先立って『呉昌碩と日本人士』（大妻女子大学人間生活文化研究所 *Osuna eBook*。同研究所HPより無料ダウンロード可）を昨年刊行した。こちらでは呉昌碩と交流のあった計九六名が取り上げられている。IV章の内容をさらに知りたい場合にはぜひ一読を勧めたい。こうした一次資料の発掘は今後の日中文化交流研究の発展へとつながる意義を持

つ。さらに中国書画とは文人の胸中を理解しあえる人々をつなぐ作用を持つものであり、日中の良好な国際関係を築く手段にもなりうることも気づかせてくれる。

ここではごく一部しか紹介できなかったが、本書は書画に通じている人にはもちろんのこと、中国に関心のある人にとつては、中国文化を理解するための有益な一冊となるだろう。

（きむら・じゅん 大妻女子大学非常勤講師）